

宇宙から学ぶこと（人生学 第20回）

Learning from Space

高 橋 清 隆

はじめに

前回取り上げたブライアン・L・ワイズ著、山川紘矢・亜希子訳『未来世療法 運命は変えられる』（PHP、2005年6月22日、原題は『Same Soul, Many Bodies』、副題は「Discover The Healing Power of Future Lives Through Progression Therapy」）の第九章「真の安心感がもたらすもの」に、前世に地球外の星から来た人の話が載っています。『未来世療法』は、他の章も、人生に対して実り多い記述にあふれている書であり、前世が宇宙人だということもあろう、ということ深く気に留めることもなかったのですが、その後、宇宙人関係の本に続けて出会うことになり、そういう時には何かがあるのであり、まず、初めに会った『未来世療法』から見ていきたいと思います。

なお、その他に、今回は、下記の4点も扱うこととします。

- ・上平剛史（かみたい・つよし）『プレアデス星訪問記』（たま出版、2009年3月25日）

※出版は以前だが、購入して読んだのは2020年。

- ・秋山真人（あきやま・まこと）・布施泰和『Lシフト スペース・ピープルの全真相』

（ナチュラルスピリット、2018年8月8日）

- ・秋山真人著、聞き手・編集布施泰和『秋山真人のスペース・ピープル交信全記録』

UFO交信ノートを初公開』

（ナチュラルスピリット、2018年12月17日）

- ・Naoko『宇宙世記憶 大いなるものとつながってQHHT®セッション記録』

（ヒカルランド、2019年12月31日）

1 パトリックさんの宇宙世

『未来世療法』の第九章に登場するパトリックさんは、31歳のSF好きの、風采の上がらない男性です。パトリックさんは、両親に言われて、ワイズ博士のところに、退行催眠療法を受けるためにやってきたのです。彼の父親は、SFの本を取りあげて、全部、古本屋に売ってしまい、「お前は火星に住んでいる空想家だ（中略）。そろそろ地球に戻る頃だよ」（223ページ）と言いました。そこで、ワイズ博士は、退行催眠を施すことになるのです。それに対するパトリックさんの反応は驚きです。「私は男性です」「でも厳密には男でもなく、人間でもありません」（226ページ）。ワイズ博士が時代を尋ねると「六万年前です」（227ページ）と答えます。ワイズ博士は、パトリックさ

んがからかっているのではないことを確認して、「続けて下さい」と言いますが、その後のパトリックさんの話は、さらに驚くべき内容です。

私は他の惑星で生まれました。名前のない惑星です。たぶん、この星は違う太陽系か、違う次元に存在していたのでしょう。ともかく、私はその惑星から地球へと移住する一団の一人です。地球に着くと、他の人々が私たちを迎えました。異なる太陽系からもっと前に移住した人々の子孫たちです。彼らは進化しつつある亜種、人間の中に混じっています。私たちは彼らと一緒に地球にとどまらなければなりません。私たちの惑星は死にかけていて、この惑星はまだ新しいからです。本当は、私たちは物理的にここに来る必要はありません。私たちの魂はまわりにいる人間へ、または他の世界から来た人たちの中に、生まれ変わることもできました。しかし、私たちは誇り高い人々です。私たちの科学技術は進んでいます。広大な距離を旅できます。そして、私たちの文明は洗練され、私たちの知性は鋭敏です。私たちは自分たちの知識と成果を保持したいのです。他の人々の中に加わって、輪廻転生を通してこれらの新しい人類の進化を助けたいのです。(227ページ)

私の仕事は工芸品や書き記されている知識の倉庫を監督することです。そして、私は理想的な場所を見つけました。地球の表面深い所にある自然の部屋です。私たちが隠したものを理解できるレベルまで人間が到達した時には、彼らはこれを発見できるでしょう。(228ページ)

私がしまった所に隠されたままになっている知識の一つは、肉体から意識を切り離す技の習得方法です。いつかすぐに、あなた方の文化も、その習得法を学ぶことでしょう。そうすると、意識を切り離すことによって、望み通り、より柔軟な体に入ることができます。その状態から、その人は肉体の中にいる他の魂たちに影響を与えることができます。それを受け取る魂にとって、この影響は聖なるもの、天使、神のような存在に見えるでしょう。しかし、それは実は、受け手も持っている同じ意識がより進化したものなのです。(229ページ)

退行催眠から戻ったパトリックさんは、「僕は今見たようなことは、何一つ想像したこともありませんし、本の作者も同じだと思います。僕の体験はとてもリアルでした。僕が何かを作りあげたわけではありません」(230ページ)と語っています。

なお、パトリックさんの未来世の一つも後に語られていて、2254年に31歳の、マディという、異星文明の発生と構造、消滅について研究している女性科学者になっているのですが、「女性は普通、高レベルの宇宙研究に参加するようには言われませんが、私の成績が男性の仲間よりもずっと優れていて、しかも宇宙センターでの私の仕事も優秀なので、彼らは私を追い出せませんでした。そうになったら、私は彼らを訴えたでしょう」(233ページ)とマディになったパトリックさんは、述べています。それに対してワイズ博士は、「変わらないものもある、と私は思いました。未来の性差別は、今の性差別とあまり変わらないようです。」(233～234ページ)と述べています。200年ぐらいでは変わらないのでしょうか。

性差別のことはともかく、精神世界の本で時々お目にかかる、進んだ人類あるいは宇宙からの来

訪者が地底にいるということ、宇宙からの人々が地球の技術等の進歩に関わっていること、進んだ領域では、肉体と意識との関係が現在の人間の認識とは異なっていることなどは、必ずしも一部の奇説ではなく、むしろある程度の定説になり得ることなのではないかと、この『未来世療法』のパトリックさんの話を読んでいられるのです。

2 L シフト

『L シフト』のプロローグは、布施泰和さんの文章です。その後半は、「宇宙人・U F O 情報全面開示への道のり」と題して、秋山眞人さんと宇宙人（スペース・ピープル）との関わりとその公表の経緯について述べられています。

秋山氏はコンタクティー（U F O やスペース・ピープルと交流している人）として別の惑星を訪れ、実際にスペース・ピープルの教育現場を見て学んだことがある人物なのだ。

秋山氏はそれを十代のときに体験したが、長らくそのことを公にしなかった。それはそうであろう。U F O の母船に乗って別の惑星に行ったことがあるなどと公言したら、「頭のおかしい人扱い」されるのがオチだ。それでも秋山氏は二十代になってから、仮名や匿名を条件にして、その驚異の体験談を公に語り始めた。一九八六年ごろのことであった。

当時、共同通信社の浦和支局の記者だった私は、「春川正一」という仮名で書かれた『私は別の惑星へ行ってきた！』という連載記事をU F O 雑誌で読んで非常に驚いた。そこには、スペース・ピープルと直接出会い、U F O を自ら操縦して、別の惑星に何度も訪問したことがあると書かれていたからだ。この体験が本当なら大ニュースである。私は早速、「春川正一」が秋山氏であることを突き止め、取材のアポを取り付けた。

そのとき秋山氏本人から聞いた話は、想像を絶するような体験談であった。私は秋山氏に是非記事にしたい旨を告げたが、「大手メディアで公にされたら、社会的につぶされてしまう」という秋山氏の切実な訴えもあり、記事化を断念しなければならなかった。その後、私も本社の経済部勤務となり、多忙となったことから、別の惑星に行ってきたという秋山氏の記事は完全に幻となった。

ところが、一九九七年。秋山氏自身がスペース・ピープルからの要請もあり、実名で『私は宇宙人と出会った』（ごま書房）を世に出した。それは秋山氏の宇宙人との体験をダイジェスト版で紹介する本であった。そして幸いなことに、秋山氏が「宇宙人と出会った」と告白しても、社会的につぶされることはなかった。時代が変わってきたのだ。

そしてこのたび秋山氏は、当時も書けなかった「宇宙人との接触の全貌」を公開することに踏み切った。本書で明らかになるが、実はスペース・ピープルは地球の「未来、から来ている。そして我々に多くの示唆を与え、地球人の進むべき「未来の方向」「未来の姿」を指し示しているのである。（7～8 ページ）

『L シフト』は、単に、宇宙人と接触した不思議な体験を報告するだけの内容ではありません。むしろ、私たちはどう生きるかについて考える内容になっています。そしてそれは、『秋山真人のスペース・ピープル交信全記録 UFO 交信ノートを初公開』とも重なる主題となっているので、今回は、後者を中心に見ていくこととしたいと思います。

3 交信全記録

『L シフト』と多少内容の重なる本が約4カ月後に出版されます。それが『秋山真人のスペース・ピープル交信全記録 UFO 交信ノートを初公開』です。長い書名なので、以下、『交信全記録』と略します。1960年生まれの秋山真人さんは、1973年から宇宙人との交信が始まったそうです。その記録を克明にとってあったのですが、散逸してしまったノートも多いのが残念です。それでも、1977年から1985年にかけてのノートが見つかり、それをもとにした、秋山真人さんの宇宙人との接触・交流の記録が『交流全記録』なのです。

この本では、秋山さんがスプーン曲げ少年としてもはやされ、バッシングされたこと、滅んだ文明があったこと、地震雲とUFOのことなど、興味深いことが多々紹介されていますが、ここで取り上げるのは、人生に関わることです。

第4章太陽系外の惑星への旅（1980年ごろ）は、全体がStep 6「スペース・ピープルの母星に丸二日滞在」となっています。秋山さんが、社会人になって一年目くらい（108ページ）に、水星系のエルの母星であるカシオペア座の方向に見える太陽系外の惑星に行くことになりました（110ページ）。そこでの社会機構と教育について紹介したいと思います。

彼らの星の社会機構は、一種の「国家社会主義」的なものでした。国家の統制のもと、国民が平等に分配を受けるというシステムです。

「国家社会主義」といっても、地球のモノとはまったく違います。その最大の違いは、住人たちが自由な創造性を発揮することを喜んでいることです。またモノを持っていたら、それを人にあげたくてしょうがないという衝動を持っています。強制的な部分はまったくないのです。

地球上の給料に相当するシステムとしては、カードによる必要物資の支給制度があります。各自、自分の情報が記録されている小さな石のカードを持っていて、このカードを使えば食品などの必要物資が支給されます。今でいうICカードのようなものです。カードの表面は、緑色で象形文字のようなものが書かれていました。

物品の支給機からは、何でも支給されるようになっています。ただ、どれだけ支給してもらえるかは、その人がどれだけ創造的な働きをしたかによって違って来るようでした。というのも、その社会ではいかに創造性を働かせるかが評価の基準になっているからです。カードには、その人がいかに創造性に想念を使ったかも記録されています。

いかに個性的で自由な創造を成し得るかが、この星の価値基準なので、人を蹴落としたり、人を

打ち負かしたりする必要もなくなります。その星には、私たちの言う「競争」や「闘争」という考え方はないのです。そもそも、人と人を比較するという概念が彼らにはほとんどないのだと思います。

彼らにとって一番の価値は、創造性を発揮してどれだけ褒められるか、なのです。闘争心や競争心によってではなく、創造性によって文明を発達させるわけです。

唯一の競争があるとしたら、それは宇宙そのものに対する競争心です。宇宙の絶対法則、あるいは神は、無限に創造し続けています。それにどこまで近づけるか、という競争心は、彼らも強く抱いているように感じました。（120～121ページ）

スペース・ピープルの教育は、地球人のそれとは大きく異なっています。彼らの教育は、答えを導き出すことそのものよりも、その答えがなぜ導き出されたかを考えさせます。

たとえば、スペース・ピープルの教育では $2 + 3$ は 5 であると最初に答えを教えてから、それはどうしてそうなるのだろうというプロセスをみなで考えさせます。地球の教育のように $2 + 3$ の答えは何か、とはしないわけです。

スペース・ピープルは答えをまず教えて、結果が出ているから安心している状態にしておいて、プロセスを考えさせるのです。つまりスペース・ピープルの教育で重要なのは常にプロセスなのです。

地球では結果ばかりを求めさせられます。実は結果主義こそが最も多くの人を傷つけ、人間の心を蔑ろにするのです。結果主義だからこそ、権力主義がはびこるし、終末思想が出てきたりするのです。

また、彼らには、テストというものがありません。考えてみれば、テストによって学力を測ろうというのも、非常に原始的な方法です。

実際、今の教育現場では数多くの弊害が生まれています。スペース・ピープルに言わせれば、「テストをしなければ学力がわからない地球の教育方法に大きな問題があるのだ」ということになります。（121～122ページ）

コロナ禍で、資本主義の考え方が見直されつつあるようです。また、コロナ禍がなかったとしても、地球環境の悪化は指摘されていました。現在のように、大量に作って大量に消費するのが繁栄だというのは、地球環境の悪化は当然のことです。今後の地球は、人口が減っていくであろうことは、精神世界においてほぼ常識です。ところが、経済維持のための少子化対策は、本末転倒であり、人口が適正に減っていくことに対応した世の中の仕組みを作っていくことが必要なのではないでしょうか。

だからといって、今すぐ、秋山さんが訪れた星のような「国家社会主義」的なものを取り入れても、大半の人間のレベルがそれに追いついていないために、不正をして他の人より多く手に入れたり、他の人の物を奪ったり、生まれてきた意義を活かさずに無為に過ごす人が続出するなどの問題

点であふれかえることになると考えられます。

さらに引用をしてみましょう。

彼らが住む星は、それはもう理想郷が実現したような世界でした。まるで夢のような天上の世界です。

それで私は、スペース・ピープルに改めて質問してみたのです。「なぜ私をこの惑星に連れてきたのですか」と。するとスペース・ピープルは「この惑星も以前は地球と同じ段階の時代があった。そして理想的に進化したケースなのだ」とだけ答えました。

さらに私が「地球の未来もうまくいけば、このようになる可能性はありますか？」と聞いたら、「それはある」と答えたのです。それを聞いてとてもうれしかったのを覚えています。それほどその惑星での体験は夢のような時間であったのです。

ところが、二日目の後半くらいから私に異変が起こります。その惑星にいるのが無性に嫌になったのです。のんびりしすぎて、シンプルすぎるからです。というのも、私は根っからの地球人で、人とワイワイやるのが好きな性格なのです。

ところが、その惑星の人たちは、みなおっとりとしていて、バカ騒ぎなどやりません。地球の雰囲気荒い滝の流れだとすると、この惑星の雰囲気はちょろちょろと流れる小川のような感じなのです。

三日目の朝から帰りたくて、帰りたくてしょうがなくなりました。地球の街を車がブーッと通る音が無性に恋しくなって、「戻りたい！」と彼らに言ったのです。

そのとき意外な返答がありました。スペース・ピープルはニコリと笑って「そうでしょう」と言うのです。「あなたが生きていかなければならないのは、あの青い星・地球だよ。あの大地の上で、あなたは語り、生き、そして輝いていかなければならないのだよ」

そのとき、彼らの惑星を訪れた本当の理由がわかりました。それまでの私は、スペース・ピープルの世界への憧れを抱いていました。最初にスペース・ピープルに呼びかけたのも、地球が嫌になったからです。

いじめられて、そういう寂しさから呼びかけました。スペース・ピープルに助けてもらいたかったのです。そういう根本的なところにある依存症みたいなものを、その別の惑星の上で彼らはすべて取り去ってくれたのです。

彼らはこうも言いました。

「あなたは地球で楽しく生きなければなりません。そして、あなたはとても重要な存在なのです。一人でできることには限りがあるなどとは考えないことです。あなたからは、子孫が、そして影響を受けた若者がドンドン広がっていくではありませんか。

千年もしたら、あなたの仲間は何千人、何万人にもなっていることでしょう。その人たちは、みんながあなたの影響を受けることになるのです。あなた一人から始まるものが、時間の経過とともに莫大なものになるのです」(131～133ページ)

スペース・ピープルの惑星に行ったことで、私は劇的に変わりました。たとえばそれ以前の私は、近くに泣く人がいると一緒に泣かずにはいられなかったのです。近くに不幸な人がいると、一緒に自分が不幸になって、代わってやりたいと思ったりしたこともありました。それが正義だ！ と思っていたのです。

ところが、そういう姿勢が本当の人間変革とか人間教育とか人間救済ではないということを彼らは教えてくれました。泣いている人のそばではいかに笑うかを見せながら、笑ってあげなければいけないというのが彼らの理論です。苦しい人のそばでは、より楽な姿勢を取って、楽な人間もいるのだということを見せてあげなければいけないというのが彼らの理論なのです。

私たちは今、いろいろなアクセサリーを持っています。権威、権力、お金、科学など、これらはアクセサリーにすぎません。アクセサリーというより、幸せになりたい、楽しく暮らしたいという願望のために編み出した道具にすぎないのです。

ところが私たち地球人はややもすると、その道具がすべてだと思いがちです。しかしすべては、人間の生命と感情の上に成り立っていることを認識すべきです。

実はかつて、今の文明に匹敵するような、レムリア、ムー、アトランティスという文明がありました。でも彼らがなぜ滅びたかという、今の文明のように、道具に依存してしまい、道具がすべてだという錯覚に陥ったからです。そして最終的には道具に支配されてしまったからです。それでは本末転倒です。本当に大事なものは物質とハカリではなく、表面的な美でもなく、人間の生命と感情です。

別の言い方をすると、環境が人間を支配するものではありません。人間の心が環境を作るのです。例えば多くの人は、自分にとって不都合な問題が起きると、「ああ、親のせいだ、子供のせいだ、いや先生のせいだ、いや社会だ、国だ、政治のせいだ」と、その原因を自分以外の世界に求めてしまうものです。しかし実は、すべての原因は自分が作るのです。自分がどのような波動を出すかということによって、その波動が返ってくるのが環境なのです。（134～135ページ）

スペース・ピープルは、「人の業」、仏教的な言い方をすると「人のカルマ」、あるいは生みつけられた運命みたいなものを、部分的にであれば、瞬時に変えられるということを教えてくれたのです。歯を治すように短時間に矯正することができます。

しかし、そのとき、「後の『レイ』を怠らないこと」ということにも気がつきます。「レイ」は、日本語で感謝を表す「礼」という意味に近いですが、これ自体が宇宙語です。後々、心を落ち着けて、もう一度そのことを見つめ直すことです。（中略）

自分の身の回りで起こることは、やはり全部自分がかかわって起きているのです。特に不都合なことに関しては、いったん一〇〇％自己責任であるとしてみるのです。

もちろん、自己責任とは言い難いこともあります。他人が悪い場合もあるでしょう。でも、一度すべて自己責任で起きていると想定してみるのです。

そうすることによって、たとえば危なっかしい人には近づかないとか、そういったセキュリティー

感覚が身についていくのです。

精神世界でも「一〇〇%自己責任」と言う人はいます。でもそういう人こそ、よく人のせいにするし、無責任な世界にいます。「一〇〇%自己責任」と言うなら、自分でやってみる事です。

ですから、突きつめてみると、そう人のせいにはできないし、そういう加減なことは言えなくなるし、自分のことも傷つけられなくなります。(212～213ページ)

このように見てくると、『交信全記録』は、単なる宇宙訪問記ではなく、人生の書と言えるのではないのでしょうか。

今の地球のレベルは小学生のようなものかもしれません。それは卑下して言っているのではありません。小学生に座禅体験をさせるのも時にはいいかと思いますが、小学生は小学生らしく、落ち着きなく動き回ることもまた必要なのです。「チョコちゃんに叱られる」という番組で、赤ちゃんはなぜ肩が凝らないかという疑問に対して、「無駄な動きをするから」という説が紹介されていました。秋山さんがホームシックになったように、今の私たちのレベルでは、そのレベルで学ぶことがあるのです。いきなりスペース・ピープルのような段階に連れて行かれても、とまどうだけで、あまり学びにならないのではないかと思います。小学生には小学生の学びがあるのです。先の引用中にもあったように、結果重視では弊害も大きいのです。小学生がいきなり40歳になってもいいことはありません。段階を踏んでいくことに意味があるのです。

4 プレアデス星訪問記

『プレアデス星訪問記』は、購入したのは秋山さんの2冊よりも遅かったのですが、2009年には出ていたものでした。その当時にはまだ宇宙にあまり関心がなく、手に取ったとしても創作ではないかと考えていたと思います。仮にこの内容が創作だったにしろ、指摘されていることは重要であるし、伝えるべきであるとも思うし、秋山さんの惑星訪問と共通する要素もあるのです。

著書の上平剛史さんは1940年生まれで、その16歳の時ということで、1956年の出来事ということになります。

地球人類の諸悪の根源とは、『貨幣制度』を社会の基礎に導入していることにあるのですが、まだ誰ひとり気がついていません。地球人類がもっともありがたがっている貨幣にこそ、人類を滅亡させる原因が隠されているのです。貨幣経済は人間に限りない欲望を募らせ、競争、格差、差別社会を生み出しています。(25ページ)

我々、プレアデス星人の社会に貨幣経済は存在しません。貨幣がなくても、必要な物はすべての人に平等に行き渡ります。我々の社会の基本にあるのは、『愛の奉仕活動』であり、『全体をよくすることによって、自分も幸せになる』という考えです。地球人類のように、『自分さえよければい

い』というエゴの心を持った人間はひとりもいません。（26ページ）

地球人類は『肉体が死ねば終わりである。それ以外には何もない』と思っているようですが、そうではありません。人間の肉体を活かしているのは、幽体であり、霊体であり、魂なのです。人間の本体は霊魂なのです。人間の肉体は霊魂によって活かされていると知らなければなりません。魂があって初めて人間なのです。人間が高度に進化していくとは、肉体界から幽界へ、幽界から霊界へ、霊界から神界への進化を意味しています。自分の霊魂を浄化し、高め、魂を進化させていくのです。自分の魂のレベルを上げないと、人間社会のレベルも上がりません。（27～28ページ）

このように、『交信全記録』と共通した価値観が見られます。仮に貨幣経済であったとしても、どのような政治形態であったとしても、すべての人が、「全体をよくすることによって、自分も幸せになる」という考えならば、問題は起こらないとも思うのですが、人類のレベルがそう高くない段階では、経済や政治の形態が与える影響は少なくないので、やはり、それらも改善していく必要があるし、それが人類全体の課題なのでしょう。

5 宇宙世記憶

『宇宙世記憶』には、そう劇的なものや人生についての強いメッセージに派手なものはありません。それだけに、創作ではなく、退行催眠をそのまま伝えていることが、話し言葉からも伝わってきます。宇宙から来たことのとまどいや、人間としての人生のうまくいかない状態が伝わってきます。

例えば、クライアントのKさんは、退行催眠の中で、生まれてきた目的について、次のように述べています。

私の魂。そうね、この地球を体験しに来たんですけど、すべては私のためになりました。すべて結果は、そう、私の成長のために必要なこと。全部、いいんです。それで、感謝しています。ありがとうって。（260ページ）

特に感情ですね。私は感情。いろんな想い、感情、愛は大事。けど、人を憎んだり、怒ったり、様々な感情を体験するからこそ、愛が一番だってわかるんだよね。すべて含んでいるから。おっきなものを、すべてを。良いも悪いもない。すべてを含んでいるからね。（260ページ）

また、宇宙の科学者の宇宙世に退行したクライアントのSさんの仕事は興味をそそります。Nは、退行催眠に導いている著者のNaokoさんです。

N 連盟でやっているというのは、生き物育てるみたいなのですか？

S 生き物育てて、あと何やってんだ……あとは、その銀河なのかな、連盟に入っている惑星の中で、知覚生命体っていったらいいのかな、アドバンストな進んだ知能を持った生命体ですね。その、文明の発展を助けることもしてるみたいですね。ただそのときに、必ずしも姿は見せない場所もあるから、こういうふうに母船も透き通って見せることができるようにしているみたいですね。

N 透き通ってるけど、いる？

S 透き通って、今存在を知られたくない知能を持った人たちには見えない。

N 文明を助けるとはどんなことをするんです？

S やっぱりその人たちが暮らしていけるようにしてあげる。まず最初暮らしていけるようにしてあげる。食べ物と水ですね。まずはそこから整えてあげて、その後はもっと暮らしを楽しむ。物の作り方とか、家の建て方、自分たちで植物を育てる、それを食べ物にもできるし、衣類にも活用できるし、という感じですね。印象としては、そこにはないものを与えないですね。外部から物を持ってくることはないですね。そこにあるもの、環境先に整えてあげて、その中でうまく生きていく知恵を与えるって感じですね。

N うまく生きていく知恵はどんなふうに与えるんですか？

S 一番最初のころは、直接降りて行って教えますね。それを学べば自分たちで子孫に伝えていくわけなんです。本当に根本的なところなんです。何が食べられるか、どこにいたら飲み水が得られるか。まずはそこから教えて、ある程度進んでくると、やっぱり自立させることが大事だから、さっき言ったように見えないように見守るっていう形になるんですね。それでも何か介入することあるのかな。

N どうなんですか？

S 今自分が見てる例ではないですね。

N ただ見守るみたいな形に？

S ただ見守るという形ですね。

N 間違った方向に行くとかってことはないんですか？

S それもあるんだろうね。どうするんだろうね、そういう時に。

N どうするんですか？

S 根本的に最初に生きるすべを教える時に、教えてるのか。もともと自分たちが入植する、そういういろんな種族が知ってるのかわからなけど（ママ、誤植）、みんな基本的に愛に基づいて行動しているんですね。だからやはり何か起きる時もあるんですよ。でも、コミュニティになって生活してるんで、自分たちで自動的に修正できるんですよ。（165～167ページ）

退行催眠は作り事と考える人もいるようですが、退行催眠では、嘘や作り事はむしろしづらいということを聞きます。これらから、私たちが、神のお告げなどと思っていることが、実はスペース・ピープルからのアドバイスなのかもしれません。そして、それらを受容するのではなく、自

分の人生の糧として、受け入れるところは受け入れていけばいいのではないのでしょうか。

